片目の老人

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
片目の老人

【Ｎコード】
Ｎ４２３４Ｖ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
シグナルは片目の老人を自分の舟に乗せた。そして共に舟で進みながら老人と話をしていて。あの神を書いた作品です。

第一章

片目の老人

シグナルの前にだ。一人の老人がいた。
舟に乗りだ。これから出ようとする彼の前にふといたのだ。見ればだ。
大きな縁のある帽子を被っていてだ。黒く、身体が完全に隠れる服を着ている。そしてその右手には槍を持っている。随分と古い槍だ。
顔は幸の如き髭が生えそれが胸まで伸びている。顔立ちは険しい。異様と言えば異様な姿である。
その老人はだ。シグナルに対してだ。自分からこう言ってきた。
「済まないがだ」
「何だい？一体」
シグナルもだ。その老人に言葉を返す。何なのかというのだ。
「舟に乗せて欲しいのかい？」
「何処に行くのかな、舟は」
老人が尋ねるのはこのことだった。
「一体何処に」
「大した場所じゃないさ」
シグナルは老人にこう答えた。そしてだ。
その場所が何処かをだ。それも話すのだった。
「あれだよ。向こう岸だよ」
「あそこまでか」
「そうさ、全然大した距離じゃないだろ」
こう老人に話す。実際に向こう岸を指差してみせる。老人もそれに合わせてだ。その向こう岸にだ。顔をやって見るのだった。
見ればだ。はっきりと見える。本当に大した距離ではない。
そこを指し示してだ。また言うシグナルだった。

「向こう岸にな。用があるんだよ」
「そうなのか、用があるのか」
「戦いがあってな」
ここでだ。シグナルのその目が鋭くなる。その青い目がだ。
「それでな」
「そこに行くのだな」
「そうさ。あんたは何の用で向こう岸に行くんだい？」
シグナルは老人にその用を尋ねた。
「旅でもしてるのかい？」
「まあそんなところだな」
老人の言葉はここではぼやかしたようなものになっていた。
「それで向こう岸に行く」
「そうなのかい」
「あんたとは違った理由だが。それでも」
「それでも？」
「似たような理由だろうな」
笑ってだ。こうシグナルに言うのだった。
しかしその笑みはだ。シグナルが見たところ。
企むものだった。そして何かを期待して楽しんでいるような。そうした笑みだった。
その笑みを見てだ。シグナルは本能的にこの老人がだ。何やら物騒な老人だと悟った。しかしそれを察してかいないか。老人はだ。
彼に対してだ。さらに言ってきたのだった。
「それでどうしてくれるのかな」
「向こう岸まで連れて行って欲しいんだな」
「そうだ。どうしてくれるのかな」
こうだ。シグナルに対して問うのである。
「それは」
「俺は自分で言うのも何だがな」
「うむ。どうだというのだ？」

「ケチな男じゃない」
それを言うのだった。
「だからな。あんたを向こう岸まで連れて行くのもな」
「そうしてくれるのだな」
「ああ。渡し賃もいらないからな」
それもいいというのだった。
「旅は道連れだ。行こうか」
「済まないな。しかし」
「しかし？」
「その気前のいいところは気に入った」
今度はだ。何も企むところのない笑みで言った老人だった。
「あんた、いい男だな」
「褒めたって何も出ないぜ」
シグナルも屈託のない笑みで老人に返す。

第二章

「ケチじゃないが出せないものは出せないからな」
「いやいや、そうではない」
「そうではないって？」
「あんたのその気前のよさは必ず幸福をもたらす」
こう彼に言う老人だった。
「それは保障しよう」
「保障ねえ」
「その通り。それではな」
「ああ、行こうか」
老人の言葉を察してだ。また言うシグナルだった。
「舟に乗ってな」
「うむ、それではな」
こうしてだ。二人は舟に乗ったのだった。
そしてそのうえで向こう岸に向かう。その中でだ。
青い水の上をゆっくりと進む。周りには山々が見える。老人はそういったものを見ながらだ。向かい側に座って漕いでいるシグナルに話すのだった。
「それでだ」
「ああ、それで？」
「戦いのことだが」
老人が言うのはこのことだった。
「どういったものなのだ。その戦いは」
「大したものじゃないさ」
こう答えるシグナルだった。
「よくある戦いでな」
「よくあるか」
「部族と部族のな」

「ふむ。では御主は一方の部族のか」
「ああ、そうだ」
まさにだ。その通りだというのである。
「その部族の戦士でな」
「それで今回戦いに向かうか」
「正直分は悪いな」
シグナルの顔はここでは曇った。
「数は向こうの方が多いからな」
「それで敗れそうか」
「戦う前から言うものじゃないけれどな」
それでもだとだ。シグナルは今は今一つ浮かない顔で話す。
「ちょっとな。今はな」
「そうか、話はわかった」
「まああれだ。戦うからには勝ちたい」
まさにだ。偽らざる本音であった。
「だから俺は必死に戦うつもりだがな」
「いいことだな。それは」
「神々の加護があらんことを」
自然とだ。彼はこうも言った。
「戦いの神オーディンに」
「オーディンか」
老人はその名前にふと反応を見せた。
「その神の名前を言うのだな」
「ああ、俺は戦士だ」
戦士ならばだ。どうかともいうのだ。
「だからな。信じる神はな」
「やはりそうなるか」
「そうだ。ではな」
「行くのだな」
戦場にと話すのだった。そしてだ。

そのうえでだ。シグナルは戦場に向かうのだった。
戦場となるべき場所にはだ。既に彼の部族の者達が集まっていた。
彼等はシグナルの姿を認めてだ。こう話をするのであった。
「よし、来たな」
「逃げはしなかったか」
「ここに来たか」
「俺は逃げることはしない」
シグナルはだ。同胞達に不敵な笑みを浮かべて言った。
「戦いからはな」
「そうだな。我が部族はな」
「何があろうと逃げはしない」
「そして戦う」
「勝つな」
「そうしなければならないからな」
また言うシグナルだった。そうしてだった。
敵を待ち受ける。敵はだ。
数は彼等よりも多い。倍はいた。その彼等がシグナルの部族に問うのであった。
「いいのか？数は我等の方が多いのだぞ」
「逃げないのか？」
「逃げれば命だけは助けてやる」
「多くのものを奪うことはしない」
「それでも戦うというのか」
「そうだ」
部族の長がだ。彼等に返すのだった。長は部族の先頭に出てだ。
そのうえで彼等に答えたのだ。

第三章

「その通りだ。我等は決して逃げはしない」
「そうか、わかった」
「それならだ」
「我等もまた」
「全力で戦おう」
彼等も長の言葉を受けてだ。戦いを選択した。そうしてだ。
戦いがはじまった。その中には当然ながらシグナルもいる。
彼は装飾のない鎧と兜、それに剣と盾で武装している。北欧の標準的な武装である。
その武装でいつもの様に戦う。しかしだ。その動きは普通ではなかった。
「何だ、これは」
そのことに本人も気付いた。何とだ。
普段よりも素早く身軽に動ける。さらにだ。
疲れない。全身に力がみなぎる。敵の動きもよく見える。それでだった。
戦場で縦横無尽に動き回りだ。敵を次々と倒していく。順調にだ。
最早今の彼にはだ。敵の数なぞどうということはなかった。
次々に倒していってだ。戦場に駆けた。
戦いはだ。彼の活躍により彼の部族の勝利に終わった。倍の数だったがそれでもだ。それをものともしない活躍だった。
勝利を収めてだ。彼等の部族は満面の笑顔で村に戻りだ。そこでだった。
蜜酒やビールを掲げ羊の肉や魚で乾杯する。その中でだ。
長がだ。ビールを飲みながらシグナルに問うのだった。
「今日は違っていたな」
「動きがですか」

「いつもよりも遥かによかった」
こう言うのだった。
「普段からそれ程悪くなかったがな」
「あの戦いの時は」
「まるで別人だった。とにかくよかった」
そのシグナルを見ながらの言葉だ。
「本当にどうしたのだ？」
「いえ、別に」
「たまたま調子がよかったのか」
「はい、普段よりもかなり」
まさにだ。そうだというシグナルだった。
「それだけです」
「そうか、それではだ」
それを聞いてだ。長はこう言った。
「あれだな。オーディンの加護があったな」
「オーディンの？」
「そうだ、オーディンの加護がだ」
それがあってのことだという長だった。
「それでだ。そこまで動けたのだ」
「そうだったのですか」
「そうとしか考えられないな。しかしだ」
「それはいいことですね」
「戦士冥利に尽きる」
長は笑顔で話した。

第四章

「本当によかったな」
「ええ、確かに」
彼等の信仰する神の加護を得られる、確かにそれに勝る喜びはない。
しかしだ。それ以上にだった。シグナルはここで気付いたのだ。
「まさか」
「んっ、どうした？」
戦場に向かうその舟に乗せた老人のことをだ。思い出したのだ。
そしてあの姿はだ。まさにだった。
「まさかな。そんなことはな」
「そんなこととは？」
「いえ、何もありません」
シグナルは言葉を引っ込めた。まさか神を自分の舟に乗せたとはだ。言えないからだ。
それで今はそれ以上は言わなかった。だがそれから一月程してだ。
今度は釣りに出る為にだ。舟で別の湖に出ようとしていた。しかしそこにであった。
あの老人がいた。今もだった。そしてであった。
親しげな笑顔で彼のところに来てだ。こう声をかけてきたのだった。
「また会ったな」
「来たんじゃないのか？」
これがシグナルの今の彼への言葉だった。
「そうじゃないのか？」
「ふむ、そう言うか」
「考えてみた」
老人を見据えてだ。彼は言った。

「俺があの戦いで活躍できて。部族が勝てたのはだ」
「わしを舟に乗せてからだというのか」
「関係がないとは思えない」
こう老人に言うのだった。
「とてもな」
「そう考えるか」
「考える。そしてあんたの姿がだ」
「わしの姿か」
「そのままだな」
こうも告げた。
「あの神様の姿だな」
「さてな。とにかくだ」
「とにかく？」
「あんたは活躍できた。よかったな」
老人はあえてという感じでシグナルの言葉に答えずだ。今はこう言うのだった。
「そのことは喜んでもいいだろう」
「それはか」
「そうじゃ。よかったではないか」
こう言う老人だった。
「本当にな」
「それをそのまま受け入れればいいっていうんだな」
「そう思うがな」
「じゃあそう思うか。しかしな」
「しかし？」
「あんた、これから何処に行くつもりだ？」
シグナルはあらためてだ。老人を見て問うのだった。
「一体な。何処に行くつもりだ？」
「わしが行くべき場所にな」
そこにだと答える老人だった。

「そこに行くつもりだ」
「戦いのある場所か」
「そうか。そこか」
「そうだ。そこに行く」
こう言ってだ。そうしてだった。
老人もだ。あらためてだった。シグナルに対してこう話した。
「あんたはこれから釣りをするつもりだな」
「そうだけれどな。よかったらな」
「よかったら？」
「乗せるけれどな。若し舟に乗ってそこに行けるんならな」
その場合はだ。どうかというのだ。
「どうだい、それで」
「そうだな。実は行く場所は近くでな」
「ならそうするか。それで行くか」
「済まないな。それではな」
「何、これも縁だ」
シグナルは笑ってこう話す。今は明るくだ。
「それじゃあな。乗れよ」
「そうさせてもらうな」
シグナルはあの時の様に老人を自分の舟に乗せた。そうしてそのうえでだった。
また二人になる。そして老人は彼と別れてだ。また別の戦いの場に向かうのだった。

片目の老人　　完

２０１１・３・７

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4234v/

片目の老人

2011年8月2日03時28分発行